

しめはへていはふゆにさのたゞ中に神いでませり里もとゞるに
かくてわざをぎ始りぬれば物見る人男女老たる若きすきくむれ來集ひていと
にぎはし。日の入るころほひわざをぎはて。御輿社にかへりおはしぬれば。わざをぎと
もあまたに物などかづけたまふ。たそがれの頃姫君御館を立せたまひ御舟めしつ。こ
たみは御舟にのる。みぎはこぎ出せば。海路はるかにさし出たる山の端より。月いさよ
ひいつるまにく。千里の浪きらくしうかいよひ渡れるけはひ世になくめでたし。
みませに至るほど月やうくすみのぼりたれば。ゆほひかなる海原あたかもすいさ
う敷きはへしやうにて。行きかふ舟のさほの雫も玉こき散すかとぞ登えたる。月の上
よりこぐ舟のといふ古き歌などの打すせらるゝに。かたへの女房の懐紙とりいだし
物かいつくめるは。をかしきことの葉もぞ出で來にけむ。ねて明すらんとかこちけむ
も。かうやうのをしき夜にこそと思ふに。下部ともは舟ばたによりかゝりてねぶり顔
なるもいと口惜し。とかく云ふうちおもほえずはらみに近づきぬ。
はらみ山をてもこのもに月てりてきよき渚にさいれ浪よる
といふも例のなり。月のためにはしばく。なこぎといはまほしき人多くのりたるう
へ。引汐に逆ひてこぎ上ればいと遅くして。御舟にいたくこぎ後れたるなむ。さすがに

心せかるゝやうにてやうく松かはなにもかゝりぬればおひしき奉りつ。亥過るこ
ろ松がはなより御輿つかへ奉りて殿に入らせ給へば。いとま給はりて家にかへりぬ。

訂正萬葉集序

夫仰 先王之淳風慕山柿之餘烈者須先熟讀萬葉集其爲書風雅也
可詠矣事實也可徵矣世道之隆汗人情之醇醜隱々妙存於史外盛哉
寧樂朝之舉也然自中葉平假字之體作而世人馳捷徑而不喜玩眞
字古藉竟此書之睡晦也幾乎千年矣間或傳寫之者亦謬魚魯訓義隨
舛近世温古之學大行豪傑之士代興前契冲師出撰代匠記使讀者旨
意粲然爾後岡部本居二氏繼記發舒幽頤釣纂精立以便學者雖然衆
說異同純駁不一似無所適從焉余嘗有此書之癖沈潛其義參攷數本
刪補闕誤加之注私考而著古義五十卷一日葛目弘守別府信榮來語
余曰斯撰之成也實來者之幸也請據其所定而改訂流布印本以布四
方令幼學入之易余答曰是我素望也二子其務旃終至有此舉嗟乎二

子能忘拮据之勞而窮晝夜之力遂使此書復舊觀信可謂勉矣因而題
日訂正萬葉集巧畢而乞序之乃述其大概而爲之書

文政五年壬午春三月

藤原雅澄撰

御遊舟岳歌并序文政五年壬午二月

櫻のめではいづくはあれど同じくは心のゆくかたにこそと姫君あてさまにおもほ
し立せ給ふまに／＼さき草の三頭といふ所より御舟よそひ船長めして石ばしるた
るみのわたりを北に折て青柳のかつら島にはて給ひぬればそれより御輿に奉りこ
もまくら高洲さをしかの鹿兒の岬など過て舟岡なる住吉の社の前にぞ渡らせ給ひ
ける足引の山のかひあるけふの日を神もかねてやちはひけんよべの雨なごりなく
はれてよもの峯には霞の衣をとりはへ空の日影うら／＼かにほひわたりて松吹風
は玉琴のしらべと聞え百鳥の囀りは笛竹の音と疑はれ雲路にかへる鷹がねを見て
は玉づさとおほえ草根に妻よぶきすを聞ては人の涙をぞ落しけるげに麓のめぐ
り立つ／＼百木の櫻はこれに似へきものもなく／＼に勝れる所もなしやをら吹過
る木の下風はそで寒からで空にしられぬ雪をあやしみかつは糸によられぬ心をな

ん歎きけるかくとり／＼のあはれさを御みづからもよませ給ひ参りつどへるあま
たのおもと人女房たちにも奉らしめ給ふいでや此ことは雅澄とおほせ給はすにわ
れらみしかき心はくもりよのまとひつ／＼つたなきことの葉は玉の緒のみだれてあ
れどよろこび身にすぎうれしみ袂にあまりて古のしづのをだまきいやしき一こと
をあかつきのしぎの羽がきかきしるして奉るになむ。

御

住吉の神のみまへに咲きにほふあたら櫻を風なちらしそ
櫻花ちらすあらしに舟岡の山のふもとによするしらなみ

よへふりし雨にあらしやそはりけん花の浪よる舟岡の山
きぬ子

春風の打吹くごとに白妙の花の浪よる舟岡のやま
せを子

神垣の松のあらしの吹くなへにぬさと散とぶ山櫻かな
りく子

さかゑ

春風の吹のまに／＼住吉の神のいかきにちるさくらかな

住吉の神のみまへのさくら花ぬさと手向けて春風そふく

か
る
子

をしめともかひもあらしに散る花をつなてにつなけ舟岡の山
舟をかふもとのさくら散りしきぬ道行く人もこゝろしてふめ

杉
子

ふきおろすあらしの風に散りぬれど花の香ふかく残る春山

か
ほ
子

千早ふる神のみまへのさくら花あらしの風にぬさと散りつゝ

て
る
子

住吉の山のあらしにさそはれてちりかふ花を袖につゝまな

袖
子

見渡せば松の常磐のその陰に色もはえある山さくらかな

下
村
延
年

柳
村
雅
澄

たわやめの袖ふきかへす春風に／＼たも散か山櫻はな
かすより外

舟岡へおはします道にて

き
ぬ
子

くちなしの色にもにたるすゝな花むきの田面に咲きましりけり
散のこる花をたづねてそこはかと打見つゝ行く春の山道

かへりたまふ道にて月を見侍りて

杉
子

舟岡をわが立くればほの／＼と山のかひよりいづる月影

同じほと御舟より月を見て

き
ぬ
子

山の端は霞にこめてわかねとも月のひかりは浪にかゝよふ

月次御歌巻の序文政五年壬午春

大八島の國たひらかに四方の海浪の騒なき御代にあふ葦は、棚びく雲の立居おきふ
しにも思ふことなく老たる若きおのがじゝ心をやりてぞ嗜みける。それが中にもあ
るは碁打琴ひきてむなしく過る月日をも知らずあるは酒のみ色好みて徒にふくる
齡をも忘れにたるさへ多かめり。こゝに文の道に分け入り言の葉の林にあそぶ限り
は春の朝に花をかざし秋の夕暮に紅葉を折り鳥をうらやみ露をあはれば樂み悲み。

行かふ折に觸れつゝ高きみじかきほとくにつけて千々の情をぞのばへける。さるからに玉の臺の上にしてあやしき賤の事業をもしろしめし。はにふの小屋に住ておふなく物の哀をしるべきは此道の業にこそありけらし。しかあるのみにあらず。くちぬる代の末に生れては是をおきて上れりし世々のたゞしき手ふり知るべき。たづきもあらし。かし。我姫君は藤のうら葉のうら若くおはしますものから。手引の糸のいとさかし。うおはしますにつけて。萬御心おきても大かたならず。なんおはしました給ふ。さてなん早くもこの心ばえをさと給ひて。わたつみの深き御心ざし。おこし給ひて。ありその浪のよるひるいはす。此道のわさをいとまめくしくいそしみ給ひて。をさく。撓み給ふ事なく。なんおはしましたしける。こゝにいにし夏ほどより。松の花。花かすならぬ。雅澄をお前にめし侍はせ給ひて。ふるき書よみことの心ばえとき聞えよと仰せ給はすに。一たびはかたじけなくかしこまり。一度は身の才拙く。詣り少なきほどを耻ぢ思ふものから。かつは此御時に遇へるを喜ほひつゝ。ひたぶるに心を竭してつかうまつるまに。く。月に日に學の道もいや。進みにすゝみおはしましたぬれば。今は高山の高き御名も。松かねの遠くきこえまし。なんげに世にありがたき例ならずや。かくて去年の霜月ばかり。月なみの御題さだめおかせ玉ひて。御みづからも詠ませ給ひ。さぶ

らふ人々にもたてまつらせ給ふに。さかし。おろかなるをいはす。とりく。に思ふ心を種とし。言葉の花にほひ出づるまに。く。幾程もあらず。濱の眞砂の數多く。積りぬるを。天とぶ鷹のかき列ねては。や一卷とぞなれりける。かくしつゝ。山下水の絶す。かたいとのより。く。に磯のしら玉。ひろひ集めては。さ。れ石の巖となり。なむを。たれしの人かは。よろこばざるべき。仰がざるべき。

御遊瀧本之記文政六年三月

今年彌生の七日といふには。姫君瀧本の瀧御覽じにおはします。さむの御あらしありて。雅澄をも御供に。さむらはせ給ふべきよし。仰ごとあり。その日になれば。辰の時過るころ。ほひに。なん御輿は奉りける。お供の女房たち。櫻色ふち山ぶきなど。とりく。に好も。しう。装ひたるいと。つき。く。し。山田橋を渡らせ給ふほど。打向ふ山々。緑なる梢ども。のうら。く。かに霞み渡れる。けは。ひたとふべきものなし。こなたの田面をはるかに見やれば。春深く。た。へたる水に。青みゆく。なる苗代のけしきも。げに。たのみある世のさか覺えて。いと。めでたし。日島のふもと。經て。ひしま河の板橋を。わたり。立石山の前。すぎて。鳥つきといふところより。北に。巡り。おはすほど。云ひ。しらぬ民の住家など。あまた。立り。のな。かめいたる。女どもの。童兒。たづさへたる。が御よそ。ひ見奉らんと。そこら。うつくま

りつゝ居たるをかし。都佐大明神の御社の邊にて午の時ばかりになりぬれば、やがて神宮寺といふてらにわたらせ給ひて晝のおものまゐるや、ありていさ此大明神の御やしろをがみにとておはしますに、宮居いとかうくしう神さび物ふりたる木立のさま貴しとは世のつねなり。此御社の前わたりには櫻おほく立並びたるが花はなごりなく散りはて、青葉のみどり深くなりぬるは、今はほとぎすも聲もらしつべきけはひかなとやうかはりていとをかし。こゝを立せ給ひ東の方いと廣やかなる野べに出でぬ。此わたりにはすみれいとみじう咲にはひたるを、女房たちは手ことに摘みはやしつゝぞ行くなる。げに心なつかしきに一夜ねにけむもいと理りと思ひなりぬ。逢坂てふ山の坂路にかゝりて御城の邊をかへり見れば、霞のひまより殿の薨どもきらめいたるけはひ限なく貴し。姫君こゝより御輿おりさせ給ひて、かちよりぞおはします。たむけを過れば道のかたへに高さ一丈餘りもあらむとおほしくて、よまほどの小石ともつみ上げたるあり。是はいかなるよしにかと人々あやしみいふに、かたへにあない知れる人ありていふやう。此石くろこそ世にねぎごとある人のしわざにはあなれ。思ふことの叶ふべきしるしには、かうなげあげたるつぶてのやがてその處にしづまり。かなふまじきしるしにはくづれ落と云傳たる。さるからに道行人の投げ

あげしが積りていつしかかくまで大きにはなれるなりといふに、われも人もほどほどにねきことなきにしもあらじ。まして若き人々はさらならむを、あいなく人目つゝましきをばいかにとかせむ。こなたかなた岩根松影などにつゝじの花の今をさかりに咲きまうけて、けふを待顔なるけしきも心からをかしくて。

君を待松の下路の岩つゝじうべ色深くゑみさかえけり

いつしか瀧本の村といふになりぬ。をちかたの山際に梨の花のいとしろう咲きこほれたるをふと見出て、雲か雪かと人にいへば、それぞといひあらずといひさたするも興あり。なほ山にそひつゝ行くほと道のほとりより見あけたる山のそはひらこの近き日ごろに木こりしたらむと覺しきに、たゞさくらのひと木二木ばかり今は青葉なるが、こり残してあるは山かつの心にもさすがにあはれは知れらん世なりけり。いと興ありておほえし。さてなむ瀧のところにはおはしつきぬ。その瀧のさま白布十ばかり合せたらむやうにて、長さは八丈ばかりもやあらんと覺ゆるが、なからにたとへばさうしなど横たへたらんばかり折れ撓める所ありて、その上にたら／＼とはしりかゝる水はすぬさうの玉などこきみだすやうに目もあやなるを、をかしと御覽じて御みづからもあはれに續けさせ給ひ、かたへの人々にもつかうまつらせ給ふ。

松風の打ふくなへに瀧つ瀬のながれて落る音のさやけさ

御

落瀧津たきの白糸くりはへてこや山姫のさらすなるらん

ゆ さ 子

かねてより音のみ聞し瀧本のたきつ水上げふ見つるかな

り よ 女

山姫のにしきおればか目もあやにみだれてなびく瀧の白糸

か る 子

瀧本の瀧の水上とほき代に誰しら玉をちらしそめけん

式 直

ちる花と見えまがひけり足引の岩根におつる瀧のしら波

政 俊

いつの世にたが懸けそめて瀧本のたきの白布とる人のなき

杉 子

照 子

足引の岩もとゝろに落たきつ瀧の白玉見ればさやけし

袖 子

石ばしる瀧の白糸くりかへし見れどもあかぬけふにもあるかな

園 子

音すみて岩間にたぎつ真清水の瀧の白玉けふ見つるかな

雅 澄

君がためたくはひおける白玉をけふ山祇やこきしかすらん

此瀧のほとりにしづまりますは六社権現とかや御社の柱に誰とはなくて落瀧つたきの白玉うつくしき妹かゑまひとけふ見つるかもとなんかきつけたる。過しみかの日は此社のかたへなる毘沙門天の祭なりとてそのころわかうるはしき友の詣でぬるよし語りしことのみと思ひ出らるゝに。手のさま歌のしらべまがふべくもなきその人なりけり。その日はちかきわたり男女物見んとてかぎりしらす立わたるよしなんきつればいもかゑまひを玉にたくへて見けむもさこそはと思ふに。げふは臣の女の赤裳のすその照なべに瀧の白玉光そふなりとなんひとりごたれし。申の時ばかりにこゝを立せ玉ひて殿にかへりましぬるは酉のなかばいかりのことになむ。この

御道すがらのことつたなき詞もてかく物しつるはおほせごとをかしこみてなり。

御遊西溪歌并序文政六年三月

高坂の大城の北いくばくも去らざるほど西溪とかやいひて世にすぐれたるところあり。なにがしの山莊とてつきくしき家居をつくり玉のみぎりを磨きたてあやしき草木をうる。はやましげ山のたすまいを心にまかせたるにつじさへいと多かるを。我君御覽じにとて。姫君をいざなはせ玉ひて。やよひの十日なぬかの日になむこにおはし渡らせ給へるに。立並ぶ松のみどりも今一しほの色をそへ。こすゑをつたふ鶯もよろこびの聲をぞ囀りける。しかのみならず野邊のひばり雲居にあがり霞の衣嵐にみだれあひつゝ。ともくをかしきものからつじの花の庭もせにみだれ咲たるが。たてしとみのもとまで照りわたるに。雨さへうちそぎたる夕ばゑのけはひげに世に似へき物やはあらん。うへもらうしくあいぎやうつきたる人の顔など見てはたとひにもいへりしこと。おもふを君いみじくあはれと御覽じて参り集へるあまたのおもと人たちにおふせて。歌をなむたてまつらせ給ふ。このことかきしるさむは例の雅澄なめりとおふせ給はずに。いとおほけなけれどかへさひ聞えむは中々にかしこきわざなめりとして。藤のうら葉のうらはづかしきものから。柳の絲

のみだれたる言の葉をもてかくなむ。

姫君御詠

春雨のふる夕くれは岩つゝし紅ふかき色そまされる

すや女

いつれをか分て手折むつゝし花一枝ことに心うつりて

ゆさ子

春ふかくにほふつゝしの紅にまた色そふる夕くれの雨

りよ女

岩つゝし紅ふかく咲く花ににほひをそふる夕くれの雨

りか女

つゝし花山した照しにほへるは君かいてます今日のためとか

ゆか子

木々はみなみとりにかへる庭の面にしたてりまさる岩つゝじかな

勝吉

咲きにほふつゝじの影に日は経なむ紅深くこゝろそめつゝ

あしひきの山さへに照る岩つゝじ見れどもあかぬ花の色かな
る
い
女

見渡せばくれなゐふかく咲出で山路をてらす岩つゝじかな
て
る
子

はしきやし子らが衣に染つけてきせまくほしきにつゝじの花
雅
徴

贈盛光氏歌文政七年甲申秋

洲崎の里なる盛光のなにかし子ども三人四人もたり。ことし彌生の初つかたその三
郎なる子のまたかたおひなるがちいさき舟かたつくりて庭の池に泛べつゝ遊びけ
るに。いかて碇にすべきものえばやと。なたかなた求めありきしが真砂のなかより
つぶらかなる石のいとつきくしきをふとさぐりいで。やがていかりとしていと
いたう喜びつゝ遊び居たりしに。折しもその兄來あひてつくく。とまもらひつゝ。こ
の石ものよりことなり。こは世の常のにはあらじをとて。手づから洗ひそ。ぎて。あな
めでたよく見れば是や此の古人の貴みおもみせしいみじき寶もの。にこそありけれ
とて。家のうちにさゝげ持ち來ければ。家こぞりてめでくつがへり。床の邊にするおき

つゝうからやからまた親しき人々をさへに招きつどへてぞことぶきあへりける。あ
るじ心ある人にしあればこれをなほあらばすゝなるべし。ふみにつくり歌にもよ
みてよ。寶とゝもにながく後の世に傳へてむをも人々にもよほさるゝに。いかておの
がひと言をもと。そのおなじ里なる下元のうししてせちにもとめられけるまに。く
かくなむ。

家長のいよゝとみせむしるしとし此そこ寶うかびけらすや

武市翁祥夢歌篇序

おほよそ夢のうちに歌よみしことは昔よりためし少からねど。さめてのちはその詞
の片端のみを覚え。あるはあやのみだれたるなどにて調のよくとゝのへりけるこそ
いと世にまれらなりけれ。さるを武市の翁いにしはすのつごもりの夜のゆめに。門
なる松の立さかゆと見てよみし歌を。さめて後物にかいつけて示されたるを。く返
し打すし見るに。調のよくとゝのひたるはさらにもいはず。まして夢にはいかでまれ
らなる例ならざらむやは。そもく此翁よもより公の事に。いそしく仕へまつれるう
ちにも花をあはれみ月をめつゝ。歌にのみ思ひをなんのはへける。かゝるみやび心
のすがくしさを天地の神たちもあひうつなひ給ひて。千代に八千代にたひらけく

安らげく松の葉のときはかきはに守給はむことかの夢のしるしにいちしるしくあ
れはこをうれしくよろこほひ思ひてたいなほやはあるべきとおなし心の人々の歌
あるはから歌あるは發句などいふものさへぐさぐさのほきことのかた糸のよりよ
りにくはれるまにくひろひつどへかきあつめつ。此ころ一卷となんなれりけ
る。これがはしに一言をくはへよとせちにあつらへ給ふことのいなみがたくてたい
かくなむ。

古言譯通奥書天保八年丁酉八月十四日

おほよそ時にあひ花やかならん人も思ひやり深くして世にしのばるべきふしをな
しおかずしては誰かはなからむ後に語りもつたふべきいかにさかしたつきはもす
みやかにいさぎよき名をとらむとかまへてわが有るまじと思ふすぢのことを直面
に諫め争ふときは大かたの世にそねまれ人のうらみをおひてはてくは善きこと
いひても人の信せぬやうになりもて行てそのいさをも立ちがたきものぞかし世中
のよろづの事何かはしからぬ文つくり歌よむすへのことも物にかきあらはしおき
て後の爲めとなるべく務めたるをばのどやかに心しづめてとり見ん人のはじめ
まのあたりきつてもどかしくめざましと思ひて聞もいれざりしこともげにとうけ

ひきしんせらるゝことのあるならひなり雅澄をちなけれどこの所に早く心づきて。
若きほどより年久しくよるひるの力をつくしてふみをあらはすことをこととせり。
しかるに去年の冬ゆくりなく妻に引れしことのかなしさはさるものにておほやけ
事のいとまには老たる父幼き子どもを養ふことのみにかつらふ身となりぬるを。
もとより家貧しくてことを助くる僕だになければ手づから菜つみ水汲みなどして
月日をわたるに今はふみ見筆とることのいとまのさらにあるべくもなししかはあ
れともわがつねに丈夫は名をし立つべし後の世にきつづく人もといふ古言をと
なへをりしをありし世に妻かきよるこひて夏の日のあつさもいはす冬の夜のさむ
さもしらで朝夕の事とりまかなひつゝいさゝかもわが志の撓みながらんことを助
けあへりしそのおもやうの今も見るやうにおぼゆれば今は暇なしとてかきさした
るものをなありてのちつひにしみのすみかとのみなしなば人こそしらねありかよ
ひつゝ見ん魂のいかにほいなく口をしきものに思はましいでやわがたてたるこゝ
ろさしのゆるびなきほどをありかよふたまも見よるこひてよとそれをせめての力
にしてほとく消えぬべかりし心を又さらに振ひおこしてよなかあかつきをい
はずいさゝかいこひぬべきほどを念じて早くよりかきさしおきたる何くれの卷々の

下がきをとりいでたるその中にしもこの書はしも初學の輩のためにとて。みしま江の玉江のこもをかりにものして。あさはかに書すてたることのみにしあれば。ちりほひ失せなんもなでふことかはと思ふを。おりたちてその心の深きをもくみて知るべきたよりには。これをおきて何かはあるべき。まつこの書をこそとわれにもものふ二人みたりが。こもたゝみ重ねあむかす通ひきて。いかでくそゝのかさるゝことの切なるによりて。こたびかきあらため物しつるになん。なほあたし巻々はおひすかひにいたづきものせむを。

同じ書のはしの裏書天保八年七月四日

萬葉類林といふものあり十冊ばかりもやあらん契沖につきてもの學べるひとのかきしものと覺えたり。そはまだしき事どもおほかれど。中にはとるべきもあるべくおぼえたれば。今この書に考合せたく思ふなり。かれさきに吾友土居眞楯といふが。かの本を寫しもたるによりて。このはる眞楯が行ていかでかの類林をしばし見せてしかと語ひければ。そはいとやすきことにはあれと。まづしき身のさがとして去年の冬とみの事錢ほしくて。質といふものに遣はしつれば。今は商人の手に渡りてあるを何とかせん。されど遠からぬほどには商かへしせんと思ひたれば。我もとに歸りたらん

ほど見せ申べしと答へたりしを。このほどいかになりしや己もことのまぎれによりて過しきぬ。かのもの本は。かうの殿の御ふみなるをそは教授館にあり。又桐間ぬしもうつし傳へられしと。そよしあらは類林を合せ見てこの書のあしからんをばたし給ひてよ。

鍼囊序天保九年三月七日

此書を鍼囊と名づけたるゆゑよしは。いかによきおり物といふとも針てふものなくしては身によそひぬべき術やはあるべき。古の千々の言の葉の綿綾にまさりて美しきををたちいでたりとも縫ふ技なくては。ついにその煩勞の驗もあらじかし。今此ふろに撰り集へ入たる鍼をとり出で。長くも短くも廣くも狭くも。うらうへ違へず本末たゞしくぬひつらねたらむには。いかばかりめでたき粧ひをもなし得てむものとなん。

仁の村紀行跋天保十二年正月

松本のぬしこの紀行かけるは。何がしの翁につきて歌學びせしほど。ことのたよりにつけて文かきならはむとて物せりとか。今はその翁も世になくなりたれば。近き頃は醜つ翁の柴の庭をしばく訪ひきて。歌のことや文のすへなど何くれと語ふ折節。

此卷をとり出て。こはたどくしきほどにかきつればいと詞遣ひてにをはなどの
違へるふし多からむをいかでいとまのひまあらむほど正し改めてしがなと乞るま
ゝに。やがてくりひろげつゝ見もて行にかしこの山際その海邊などにてよめる歌
のいひしらすをかしきはさらなりよくも目とまるところくをくまなくかきとれ
るものかな見るたびにたいにその境にいりたつこゝちのせられてあく世なくわが
年頃病はけたる心をも慰むるものから日かす經て留めおきたらんにはいかに待遠
にか思ふらむとてこそ。さてせちにこへることをなほありてかへしおくらむはほい
なきすさびなればとて。一二のさかしらをかたはらにかき加へつるになむけふく
とあすかるのしこつ翁云。

書譜諺解自叙

余少時有好書道之癖把讀書譜每讀輒患理或不易曉於是就西洲翁
請問其義旁求平信久證註俯搜諸家書論妄摻入私本尋翁奄化矣余
亦臨池之心隨而廢至今殆二紀焉屬事務之暇摺撫昔日聞見所得訓
釋而授之一二蒙士聊應其索云如用俚諺者豈啻余之庸劣要欲使幼

童速理會也且夫孫氏書譜舊兩卷而今僅存總論姜氏憂其亡補之著
續書譜云此釋特其總論耳

天保十三年壬寅三月

古義居士

贈金子氏在于江戸書

武藏野乃宇家良我花乃時止無久慕比川有物可自古人乃云之痛伎瘡
鹹鹽灌伎重馬荷爾表荷打止云流事乃如久老爾有吾身上爾病其乎
加豆有婆筆執業母物憂豆一言爾太聞延不申豆過之來乎如何奈賣可止
所念止下恐久思侍乎多麻河爾左良須手作左々良々爾恨美不所念
看豆之遍多奧山乃八峯乃海石榴列々爾書連爾示賜禮卷復之見每爾
直向居豆言問交須事乃如久甚母喜之所念流故須牟也家久悅備聞
延可申乎今日爾怠利來波奴惱伎自性止見直志聞直志賜豆今利後母
埼玉乃津爾居船乃風乎痛美綱波斷母爭傳言勿絕賜與然母比者乃
間乃風雜雪降夜波老身乃殆難堪乎事福眞幸座豆勤美奉仕賜布間

母休息布事無之 神無月鐘禮零之世乃古事波 波布理不賜止奈風音乃
遠音爾聞是悅備侍流何時之可向南山乃岡邊道爾丹管士乃將薰時爾
急久成奈壓乞速久迎參出平物止乎下待居爾許

十一月廿八日

藤原雅澄畏白

金子君

辭別白

因幡國新田殿乃殿人堀直孫子久山秀英止云二人勝且古墓布人等
母止奈故此度山菅乃根母許呂碁呂爾御許爾語比其進且世之許都翁爾文通
且波之古事乎問聞久麻欲為止里織音乃都々婆々羅々爾乃里賜比遣之事且
波愧念物其可具爾承諾比申後其御答登時母可申有乎之時母之熱之禮惱
之可今少左波夜發止奈思物其可默居波甚除且禮無久罪遁延呂難可其橫山乃阿
會爾語比進且世聞延申乎世之所聞看賜乎且如此具爾承諾比申之可其人等乃
心乃麻爾々々言借將思條乃事波文且之言遣乎世事乎由緣有乎時乃里

賜比傳賜與且將此方利與言先立且其人等閉文可贈狀爾乃里賜比遣世之
今母病怠里不竟且筆執業乃物憂可禮其人等乃言信乎侍居爾奈有流家此
由母乎不惡狀爾爭傳乃里賜傳賜與且又白古言譯通永言格自本波實乃
草案乃住爾之目安可其大崎乃阿會乃許且清爾寫之居賜禮不遠間爾進
爾須將件乃二書實乃事竟波爾不至有老疎仗當爾令見時波愧思布物其可
如何波為乎不惡御心志良比為賜與且嗚呼恐

贈安並氏在于江戶書

志可止不有鬚搔撫且吾乎除且又人波不在止常波保已呂比居之物
其可今波和々氣懸爾加賀布爾取見妻母無禮比日乃風雜雪降夜乃甚
母寒且久殆難堪乎奈流會許波仁五十樞八桑枝乃如御家舉且立榮川陸奧乃
吾田多良真弓弦着且弛時無久勤與奉仕坐其乎止推量利申爾然而武
藏野乃宇良敞肩燒麻左低每仁所知看賜之比事母有乎去々年乃十二月
乃初津方何事乎不足念乎氣山邊乎差且晚闇止隱之仁妻乎日仁異仁雖

待不歸來 婆形見仁置留綠兒乃乞泣每仁雄自物負美抱美夜波嘆可
 明之晝波裏佐備暮之侍利之五十殿寸且短物平端截止古人乃諺仁云
 留事乃如久去年乃秋利病臥味乃侍利之冬仁成波且驚呂乃乃之堺仁至利之
 道反大神乃恩賴仁依之且辛珍之黃泉反留部物其可猶美都禮仁美都禮仁川蛭
 子乃狀止為且今波官仁伺候布事仁太得不為且打細仁匍匐手廻利懼
 利志自麻比侍仁奈有留氣故無骨蚯蚓乃美乃受書仁太得不為波一言平之聞
 延不申且過之來留留多麻川仁左良須手作左良乃乃仁害女不賜恨美
 不賜且去留文月波爾不思仁慇懃留奈御書簡賜留世多相見奉之如所念且病
 癡多心仁齡可延所念且甚母懂事乃限仁奈有留氣其悅備登時母聞延將
 申止思布物其可今日迨仁怠留惱伎身性止見直志聞直志賜且爭傳罪
 免之賜且將勤美仕賜布間仁月雪乃時乃平無用波仁過之不賜且之歌思
 辭思之波賜止布聞母奈懂伎爭傳能杼可成幸時仁梅豆良可留奈一言平太聞久
 欲母久奈今利與後母事福真幸座且埼玉乃津仁居船乃風平痛美綱波斷母止

御言波不絕且宇家良我花乃花咲仁咲榮座平御消息乃聞延將來春
 乎待仁許十一月廿八日畏美畏母美如此白波 藤原雅澄

安並君乃御許仁執申賜聞

報贈金子氏在于江戶書

春去婆先福草乃福座氏勤美奉仕賜比新年乃始乎待悅備賜止布聞奈
 歡之伊夜瘦爾瘦之吾身母拔食平茅花萌出留春爾相有加故初
 春乃豐乃壽詞根母已呂乃乃爾書集氏示賜留事乃甚母與呂已保之久
 搔垂之老身乃皺延留如母奈所念留且令聞賜留隅田川乃清母止清留言
 玉波鏡川見止見不足母氏奈卷復之侍利奴今波春邊止開藤乃浦葉乃心安
 久平久還來座氏夏野乃左由利乃花咲爾爾布夫爾相咲平日乎御家
 舉氏待賜止醜部翁母荒穢超外行浪乃外心不思氏今日加明日止加指
 折月日數部居爾許故

隅田河事須牟也久氣執持氏不通事無久速還坐

鏡河彌磨都還來氏影見平君平片待吾曾

正月晦如此申由平金子君乃御許爾白賜止藤原太郎稚澄畏白

九月十三日夜 内膳君のおほせによりて奉れる詞

去るもちの夜道遙せし鏡河さやけき影あかずは覺ゆるものから後のこよひは里離
れたる方に物して見ましかば浪のひき穢の松風などに又いかばかりか心のちり
を拂はましと例の語ふ一人ふたりと出立夕つけて絶海のわたりを渡る吹くる萩の
上風もさのみ肌寒からず覺ゆるは秋くはれるとしなる故なるべし五臺山の麓な
る物うる家に立より煙くゆらせつゝ出行々て船より東孕のなはてにわたる山越て
遠津の濱のと聞えしは花によりてなり今日は月のための遠津越なり春秋のたがひ
こそあなれ月花にうかるゝ心は昔も今もへだてざりけりと身のほどを忘れて人々
しくいふも我ながらにくさげなりやとつぶやきつゝ行くを友なる人の聞とがめて
あやしむかしの人の云る遠津をこゝのなりとするか説ありやなどかたぶきいへば
いざ給へ道のなくさに物語らむそもく大かた世中にある人さえすぐれて思ひや
り深かる際も身に福なく時にあはざればいきのかぎり世にかすまへられずいふか

ひなくて朽果つるぞかし。まして海山のたゝすまひ世に假す處ある處のつひに人に
知られずして口をしかるもこれかれ多し。又さばかり見どころ無き處にても昔より
世にしられてよき人の言の葉にあらはれ物のをりには先とり出らるゝもおほし。あ
るはむかしは名たゝりし所の時移り自ら世に埋れて名をだに人のきゝ知らぬとに
なれるもはた少からず。そはいづれも時にあへると時に逢はざるとの遠なるべし。さ
ればかの遠津よ奈良の葉の名におふ御代の古言に出たれど。何處にありといふこと
をばしられぬにや。世々の物しり人だちもさだかならぬ由のみしるせり。そを名の同
じからむからに打つけにこゝのなりといはむは。吾方に引かるゝは人の情の常なが
ら。あまりしひつけたるわざとや云れなむ。さればたしかにさだめむとにはあらねど
今名のさま所のあるやうなどもて思ひ廻すに。遠津はもとかなたの濱邊の名なりし
か。そこへゆく山道なるからに世に遠津越といひしにこそ。むかしの人の山越てと云
るやがてそれにやあらむ。さるを世にふるまに。本のは失りて山道の方にのみ名
を残せるにや。さるは上れりし世には世に聞えたるうま人たちのこの國にいませし
をも少からねば。そのかみには此處も彼處にも争でか名たゝりし處のあらざりけん。
さるを中頃より事のまきれに世に知られずなれることぞ多かるべき。いでや今は松

の花はなかならずならぬ雅澄らかなるなき言の葉をさへもかくやむごとなき御前に時につけつゝめさけらるゝことになれ、ばこしかた世にはひかくれたりし人々も誰かはしく、に出来さるべき埋れはてたりし名處もいつくかより、顯はれざるべき。されば吾等が推量の千重のひと重ももしほと、に當れらむには今やその處の世に顯はれむとのさとしならむも知るべからぬをやなどひげかき撫で、しはぶきいひつゝ老の坂路のなやましきをもわすれていつしか濱邊には出ぬ。あれ見よやと友のいへるは例の縁言をあまりにもどかしくや思ふらむとほ、笑まれぬやがて眞砂に蹲りゐて打出來し心もしるゝと打誦するもあれは、松の根にしりかけて、天の河出るみなとはとはりあげたるもあり、げにやかゝる興にあひて、ゑせ歌よまむは中々のことさましなるべし。さはあれと例のくせなればなほえあらて今やうひとつぞうたひたる。

浪より出て浪に入る月の光のきよければ今はとほつのとほき名もかくろひぬべき限ぞなき

中興鑿言諺解自叙天保十四年癸卯十月

中興鑿言之爲書也辭簡義博幼學之士患輒難達其意矣是以嚮有用

俚言僅解本文者題以打聽盖一先生所講說門生錄之而筆削之業未畢者也由斯修未修者繕寫而授之一二童蒙雖然余素聞見寡陋其未諦者訪之通儒而是正之請竣之

へたのながものがたり

千里の濱ならねど某の海にも興ある石はほと、に有りけり。その石の形状は直きも曲れるもけはしきもなだらかなるもさま、ありて。或は島このみ給ふ君の弄ひとなり。或は洲崎に居られてやんごとなきあたりへ出て時めくもおほかり。そのなかに一ツの玉含める石あり。廉もなければ端と云べきところもなし。もとよりその徳あることをば深くつゝみかくしたれば誰かはその玉含めることをば知らむ。さればいさゝか才器あるかたへの石どもよりは只かいなでの細石とのみ思ひあなづりおとしめ物としもおもひたらねと。さらにおのが光をいろに出し誇ることをしらすてあらがふよしもなければそむくことも一なし。世間にあることとありかゝりもうらなく語ひかはしなみ、の石どもとなれまつはりて遊びける。しかはあれども天の沼琴と狸の腹つゝみ和せんとしてもやう、に憎みそねみて。何ぞがな一ツのきすを見い

で、わたつみの宮へ讒し言して辛き目見せてんものとあまたの石どもかたらひ合せて、彼方より攻かくれば此方へころく、此方よりせめかくれば彼方へころくと轉びく、てころびのはてはと。某か濱邊にありしほど鹽椎とかいへる翁の己が旅のやどりを訪し夜の夜話、そのさきはいかにと聞んとせしほど世をうみへたの長物語中々にもとかしと聞倦んじてや、いざ一つ獻げんとかたへの人のかはらけとり出でし友のさわざにきゝさしてやみにしはなほそのおくこそゆかしかりしか。今考るに違つ昔は石の物いひし例しも珍しからざめれど、のちの世には絶て聞えぬことなり。されどけうとき海山などにはなほ今もさることあるまじともきはめがたければ、この物語もむげなることにはあらざるにこそといと、残り多くこそおもほゆれ。

松本弘蔭におくれる詞

吾ふることの屋の園に仙翁とか云る花のこのふつか三日ばかりいと美しく盛に咲けり。時は卯月の末つかたなりけるが、きのふ松本のぬし訪ひ來て夕暮に立歸り玉ふほど、いかで一枝をとありけるが、他人には手ふるゝことだに許しあへねど、たとひ妹とわが寝るとこなつなりとも、この人にはいかでかと心に委せつ。さるはこのぬし古ことを深く尊べるにつきてなにかしを實の親のやうに思ひまつはし、年久しく通ひ

來まして病みしれたる心をさまざまに慰め、身を養ふすぢの助となるべきことをくさゝまめやかに語ひなど、世に頼もしき人のかぎりになればなりけり。つらく思ひ廻らすに折しもきのふの夜は甲子といひて世の人なべて大國主大神を祭るならひなるが、年頃かのぬしは殊にあつく信じ給ふにより己がこたび新に園を拓きさまゝの花さく草を植えならべ生したてたるなかに、折にあひてかく咲匂ひたる花のはつほを手折てまつかの大神にたむけまつり、翁の身のさきく命ながゝらむことを誠をつくしてのみまうさむとの淺からぬ心しらびにてこそありつらむ。又花の名も打聞くには何とかや唐めきてこはくしきやうなれど、文字にうつしては老の身のほきことのすちにはふさはしからぬかは、只みづからはなつかしと見をりたるのみにて、そのほどはをる人のこゝろをも知らてありしはおくれし心のさかなりけりとひと耻かしくはおもふものから嬉しさに堪すてかくなむ。

大神のみたまはりて花ゑみに千代とことにはあひしゑみてむ

う月はつか九日

かくいひおくりければやがて弘蔭。

花ゑみにいつもゑましてさかえますよの長人の

とのみつるといひつゝまとひ來にけるこそいと興ありしか。

九月十三日の夜の詞

百敷の大宮ながら八十島を見るこゝちするとのたまひしも後の今夜にこそありけらしいでや玉しくわたりのことは知るべくもあらず。田ふせの庭に蹲まりてわらふたあむ男あれば碯の塵を拂ひてとき洗ひ衣うつ女あるもほと／＼につけてげにこよひの空の明かなる影を喜ばざるはなかめり。己はたしづ山賤の中にまじはり住てさる方のわざをもふつにえはなれあへぬ身にはあれど。えせ歌好む僻あればとてこよひの空をいかに見きやと例のやんごとなきおほせもぞある。いさゝかつゝましからずげにはえなくもてなしてなめげなるすぢをさやはきこえおげんとてすゝばみたる横笛とりいでゝ今様をこそくりかへしけれ。

しばのいほりのしば／＼にいぶせき胸の霧はれて今夜の空にすみのぼる月のひかりはへだてもなし

こは九月十三夜やんごとなきおん前に奉らんとてものしつるなり。

春立日の詞

山かたつきてすむ庵のさかど常はらうがはしきことも知らぬを例のときいたれば

かすにはいかでかはとて八重葎とぢはてたるかどをもよきぬはえづきはたる里長になむよに淺ましくめざましく胸つぶるゝやうにてしもと見るたびに身はひえわなゝかれながら辛うじて年もくれぬ。明行春の光はいづこともわかねは空のけしきうら／＼とめづらしくかすみこめたるに。やれがちなるかきつの梅のやゝ綻びそめてまつ鳴く鳥の初ほぎことをかつつけ顔なるもおとろ／＼しく。ねやとまてきたちよばひしきのふの聲にはやうかはりてくつろかなるこそ世に知らずのどかなれ。げにぞ千年もあらまほしき御代の惠のはしめにはありける。

にくまれ口

おのれ未若かりしほと。宮地安並大町の翁さては葛目山田別府のぬしたちに誘はれて。花紅葉の折につつゝこゝかしこの名たゝるところに遊びしことありしが。そのとき／＼かはる／＼紀行といふものを物せしことにて去る度は何がしが書きしによりて此度はくれがしにめぐるなどいふうち／＼に定のありければ。そのつらに敷へられし人のかぎりは辭みつべくもあらず。そのほど己も辛くしてえせ文かきたりしことなんありし。近くは又この五年六年ばかりあなたにやありけん。大崎吉田

横山のぬしたちにそゝのかされて時鳥のや、盛に音づるゝほど浦戸の海かけて遊
 びしことのありしはいと興ありしがその折しも詠へしにはあらねど大崎のぬし
 の紀行めきたるものをぞ物し給ひし浦戸の岸にさし寄せたる船に男女あまた入居
 て坂はてるゝとやらんざればみたる聲して打あげたるを己も常はかゝる筋はえ
 しも思ひ離れぬをけふは師の翁にしたがひ風流士たちに交れるけにやいと開苦し
 く覺えしとかき給へるげにみやびたる鄙びたるも心のならひによるものこそあ
 りけらし道のなくさにしあれば狂れめきたることなどはふつに云ふまじとはあ
 るべくもあらぬば誰かはとがむべきされどさるからこといふも雅びたるかたの戯
 ぶれのみにてさのみ人きゝ悪くとり亂したることいふべくはあらずはた好み信ず
 るところのすぢを只管に離れずして語ひかはすは心を慰めつべくもあらずかしき
 のふ明白に杉本の御社に詣でがてら女の子とも携へて神谷の里なる演劇見せし道
 すがら山のたゝすまひ川の流につけて心をすませしはげにいつとせ六とせ以來の
 いぶけさをはるけつるわざにこそさるを往來の道すがらぬしたちの翁の身をたす
 けいとほしがり給ひよろづ心をとりに給ひてなくさめ給ひてしは嬉しといふはさる
 ものにて淺からざりし惠になんさはあれとわざをぎに奪れて常の心掟やほとく

失ぬらんいでたつ足もとより始めて心のゆく限り語ひかはし昔を慕ひ今を喜びて
 風雅を盡しつゝ紅葉を折り花をかざして家に歸らましかばはた忘るゝ世なくいか
 ばかりにかはうれしからましとかねて思ひしには變りてえうせずは自も鼻唄とや
 らんいふもの打すしつべく見えけん面もちのいかに蔑らはしくありけんと人の思
 はんほどもいとまばゆく本意なくこそかくては彼の紀行といふものおほする人
 ありともえ物せじたとひかくとも何をかみやびたるものゝ數にはかぞへたてまし
 と口をしく淺ましくぞおもほえし。

九月廿六日の夜燈火の下にてしるす

古義軒醜翁

學 訓弘化二年十二月十八日

言靈乃 徳用補佐 得 將念人 一 天津神國津神 爲夜 爲夜 爲夜
 君 一心 以 彌務 彌結 穴 奉扶 奉 如此 各々 已 家
 々 已 門々 不滅 彌高 彌廣 祖名 興繼 弘 念 許已 念 意中
 夜 晝 倦怠 無 恐 謹 於母夫 教 事 不過 不失 勤 明
 然爲 天津神國津神宇豆 賜 漏落 事 見直 聞直 坐
 山 齋 集

已我古事學乃業平彌進米進彌榮延榮米不須凶目凶目杵穢伎邪說
爾相口會事無久已我比伎婢企是爾託彼爾依互漂蕩平心鎖利且如此
為婆斐太乃工我墨繩平打延流多事乃如久真澄乃鏡乃面平磨明留多事
乃如久唯一條爾正久之明爾可言靈乃德用補佐乎得祖物言

麻田英直之女石碑裏書左川人

文のしげ道をたどり詞の林に遊ばずしては昔の人の心のみやび物のあはれ知れる
さまなど悟るべきよしもあらじかしこゝに直子といひしは麻田英直か娘なりき早
くの時より物の哀しれる様を心にさとり身にしめたりしが故に花の朝月の夜はさ
るものにて樂み悲ひ行かふごとに思を述べつゝ思の限り世にはださるゝとなかりし
は男子ならざりしが口惜しとも云ひつべししか心のびやかなりしのみにあらず筆
のさま目も綾にまことのすぢを書きえたりしを人々の慕ひ思へりしまにく近き
わたりの童兒どもを多く集へて手かく業をいと懇に教へたりしその功はた大かた
ならめやはことし嘉永元年四月廿一日といふにとはは六十あまり八にしてみまか
りぬるを後の世その名の朽なんことを思ておくつきに石ぶみ建んとするをおなし

くは女文字してことこのよし記してはふさはしからんをいかでと語ひおこせしまに
くかくなん。

大幣評輿書嘉永元年十一月

桂園一枝と名づけし歌の集ありとそその集は世にぬけ出たる歌よみのなりとや人
の語るを聞たりしことのありしその全書は未見しことだにもあらずさるは己れ早
くより旨と上つ代の手振を好む癖あれど中つ世より以降のものをば廣くもたらず
まして近き世ふりをひたぶるに好み玩びてめづらかなる一ふしをまうけいで世に
名譽をとらんと構ふる比の言の葉にはさらに目を留むべきものともせざればなり
然るをさきに彼集を秋山の某といふか讀て聊抽出て評せることのありしをかの桂
園にはやく遊學せし中川の某といふが見て甚く憤りて難じ返したるはこの大幣の
文なりとかやこの文を北川の翁が寫しものし己か許に携へ來りて語らるゝ様この
難陳のさまよ尙あかぬふしのあべかめるを暇のひまあらんほどいかで評し直して
よと誂へおきて歸られきさてのちに開き見もて行くにげに翁のかたぶかれし如く
如何にもおぼめかるゝくまのなきにしもあらねとおのれ詣り深からぬはさるもの
にて固よりたどくしき近き世ふりの上をつゝましげなくなまわろく論はんは中

々の人わらへなるべければなほありて返し参らすべきを翁のせちに求められしを
いかでけにくつれなくやはとて十か一をこゝろみに書添へたるは誰ぞまことに
開のよの礫ならんとはぢおもふものから。

神習之卷序嘉永四年辛亥三月十四日

皇神乃伊都久之伎國言靈乃佐枳波布國登波神代與利神乃傳之古
語那理言靈乃佐枳波布爾不依婆何爲爾皇神乃伊都久之伎理乎知
得氏麻斯夜言靈乃佐枳波布理乎知麻久思波婆古言學乎伊蘇波伎
不勤氏波有倍可良受古言學乎伊蘇波伎勤牟流爾波自古風乃歌作
不習氏波有倍可良受故已爾就氏古言學乎伊蘇波伎勤牟流人々吾
古義軒爾集氏古風歌作習事乎始牟時者今年三月十四日夕日降那
里氣理是以自今以後月別爾今日乎奈母會日登定米多留其會開流
日作出勢留歌共乎時々書集置波此卷爾那毛有氣留乃歌曰
古事乃其神語爾神習勉衆諸勸衆諸

門田爲之家曲玉記嘉永四年七月日

物皆者新好常者雖云信庭舊代之似勝有物其多有來其之中煮八坂
之曲玉跡所聞者懸卷母可畏神寶爾在者更似裳不云不然母上有之
代庭彼此人之貴見翫之例不少有之乎世下而者可惜名乎谷不知人
母多成有寸近世丹曲玉跡云而土中與理掘出世之等云物此處彼處
丹難在其波多上代之庭不有由物知人既云置而有爰門田某甲之齋
敬而貯持有曲玉常云物者更丹彼自土中掘出世之物之類庭不有故
有緣而既往之時與理得而有由躬自者神代之物友思多米理一日其
乎已似示而云那良久冀此乎鑿定而一言記而與此曲玉似副乍家寶
跡爲而子孫煮傳而鹿常乞願事懇切爾有手爾取而熟見煮如何方裏
似光澤乎含而甚母神左備奇友奇之某甲之心乎清久研有庭布佐波
之可母牟可之可母已乎遲無劣有而已似不有天明玉之後裔那良禰
婆何爲煮其品定乎者可爲唯玉主之云有登時書著似其有斯云者

或人の著せる書のいぶかしき節々を門生宮地重房の問へるに答へたる書をかりに試非言と名くその奥書

智者も萬慮の一失はあるならひなりとかや云へは今その一失を見出るとかくもどき聞ゆとも何かは智者の耻ならん。さはあれど愚老は今千慮しても一得はかたくなれ。ばいかでか彼が一失をももどき得べき。されはしれぐしきこといはんは中々にわが辱をまねくわざなりとは思へと

いふかりてとはすこたへをもたあらしといへはかしこしおぞのしひ言とは思へど聊か書付侍りぬるは老のひがみなるべし。とるべきあらはとりたまひてよ。

日本紀歌註序嘉永六年癸丑五月日

佐嗟羅我多邇之枳能臂毛弘夢須寐陀黎陀黎耶始比登謀等枳我底
珥勢始伊邇之倍許苔婆鳴鳥智箇多能阿邏々摩菟麼邏菟麼邏伽珥
伽武伽倍彌毛虛侶珥苔枳和開底欲毛能臂登珥志梅佐摩玖須異曾
斯伽謀武伽斯伽謀布瑠許苔摩彌夫苔謀波陀例耶始比登伽梅涅與
呂許麼邪留陪企伽玖伊多豆岐斯比登波陀例耶始比登曾橫山直方

主珥那謀阿留此主等斯比佐珥於乃禮珥余曾利底謀能等布知那美
珥斯我許波始乃摩邇摩邇伽久臂苔許苔曾陪多留珥那謀

玄文靈玉詞龜谷某所詠

懸卷も畏き纏向の珠城宮に天下しろしめし、天皇の山城にいてまし、ほとかねて大御心に思ほすことの成りなむにはその験見せてよと御うけひまし、くしを忽ち河中より大龜出來にしかば御矛もちて刺給へるに、奇しきかも怪しきかもやがてその龜白石となりたればいたくよるこはせたまひしが、果して大御心におもほせしこと事なりきとそ、さる畏きあたりのことをとり出てまをさむはおふけなしともおふけなければ、かの桑名の斐襲か牟士那の腹より得てし八尺瓊のたくひにこの浦里の海士がとりし龜の腹より得にしをその龜に出しことは又奇しとも奇しくあやしともあやしからざらめかも、其玉の大きさは桃の實ばかりあり、時は今年四月の望の日になもある。かれ難波なる玉すりの許にやりて磨せけるにいよ、光いで、たふとくめでたきものにぞなりにける。なへての色は薄黄色にして、立き雲の形の薄き濃き文なせるたとへていはむやうもなし。から書に靈龜は五色玄文とかいへるにも似か

よひたることなるによりてやがてその名を玄文靈玉と名けて万代まで吾家の寶といつきたくはへおくになも。

四〇六

春の頃心地傷ひて久しく籠りをるほと。やんことなき方より物賜はせたる其喜びおもと人の許まで聞え申す消息文

卑しき諺に春兎はそのからとにたにも價百のこがね侍るとやかくまで世の人々の得がてにし侍る此頃の兎にし侍ればたとひ死ぬる命生もぞするとはかくしからぬ身のそを得侍らんこと難からじやはさるを雅澄の日ごろ惱みわたりしを忝なくも輕からぬ御祈ごもせさせ給へるしによりて辛うじて怠さまにはなり侍るものからなほ心もしれぐしう身もひた弱りによわれるを畏くも覺束ながらせましくして山に野にさしはへてとみするおかせいめたてわたさせ給ひてとみにかのうさきをえさせ給ひそをやがてうじさせ給ひて給はせたるはありかたしと聞え奉らんも世のつねになんこの御賜物の力により侍りてとくさはやぎてましといと頼もしうなんげにもものたまひしめさせ給へる如くこれぞすなはち大山づみの大神の御心ならんと思へばいと貴くかたじけなくなんさはあれと君の世をすくひた

まひ人をうつくしみ給ふ廣くあつき御心を天地の神たちの深く感じおもほしめて給へるにあらずばいかでか御心のまに〜かゝる山幸をは得させ給ふへきまことかくありがたき御惠を蒙ふる時にあひ侍る身こそいと喜ばしけれこの御喜はずなほちまう昇りてこそ聞えあげめと思ひたまふるものから身の病しきをばいかにかはせん。さりとうち思しまゝのくだ〜しきを見ぐるしう書きみだりて御覽せさせんはいとおふけなくなめしきわざなればいかて千重のひとへをだに折あらば聞えあげ給ひねかしあなかしこや。

やんことなき方のみもとに侍らふ人に遣すせうそこ文

春はをしほと〜きはた聞まほしくて静こゝろなき頃にも侍るを御家こそりてまさきくおはしましまのおまへたちにも日にそへてさはやがせおはしますよし振はへての給ひおこせつるこのうれしく喜ばしさはさるものにてまつそ心落居侍る醜つ翁よおぼろげならぬ御光ともによりてこの頃はほと〜春野の雪の残りなく身の惱ましきもおこたり果てぬれば今は候ひてくさ〜の喜び聞えさせばやとは飛立やうに思ひ給へながらありしなごりになほ山田のかへるの力なきやうに覺ゆるのみ心ならねど手つか杖つきもつかずも遠からぬほどにはとこそ。さてしもたいめ給

はり心のとかにむかし今の御ものかたりをもうけ給はり過し日のとありかゝりのことゝも聞えさせ侍らはいかにいふせき胸のうちをもあきらめてまし。さても月ころいかでかばかり至らぬくまなくありがたき御惠をば被ぶりけんとかやしきまで思ひ給ふればさふらひたらんほど何より始めて禮まうしつかうまつりてはよからましと。中々に心まどひのせられ侍るをはいかにこゝろえてましやかしこ。

花 詞手島氏所詠

年立かへりぬれと老はみかたくある身はなほ火桶のあたり去りがたくて手のうら打かへししわおしのべなどするのみをわざとせしをやうく春もなかばたけゆくにつれて空の景色のどかに日うらくと照りわたるまゝ端に出てそれがしの峯かれがしの磯などはとはるく思ひやりつゝつげんといひしやま人のと打すじつゝゐたる折しもかどを入來る人の音す消息するまゝにあやしいかならんと人してとはせたるがをかき童子の某の許よりとて二ひら三ひらばかり今咲きはじめたる櫻をながくをりて持て來れるこそ嬉しきことの中にもかへすくうれしけれさるは必しも馬に鞍おかせずともありぬべしとの心しらびにこそととりあつめつゝあはれとおほゆるに。

月前紅葉詞手島氏所詠

八月の半過るほど夕つけて例の睦じくあひ語ふ友の許にものしつあるじはゆるしき武士にしてその心おきての世にをしく事しあらは火にも水にもなど世の常なるに様かはりていみじうなさけくしき方にもおくれぬ人なりければ花の朝月の夕をも徒には過しやらすてなん。さるからに前裁には梅櫻楓はゝその類所せく植ゑならべ。このもかのもにはかなき柴垣まばらに結わたしなどつきくしき家居なり。やうありておなじ心なる人また二人三人さあひたり。今一きは心ゆくこゝちのせられてかはらけあまたゝびめぐるほどに。やうくうち外暗くなり行まゝいつしか下部して火ともさせたるをもしろて。人々ゑひすゝみほめ笑ひはかなき物語もいとへだてなく打とけて興あるましらひなり。かくてよひ過るほど東の山きはやうくほのめきわたるは月出たるならんと待とるほと。とばかりありていとほなやかに照渡りつゝ木々の梢そこはかとなくうすくこくにほひあへるに。夜さへ見よとなど打すしたるはげにたとしへなく心もすみゆくわさになん。

小松榮盛墓碑文安政四年

氏者平名榮盛字平者小松少大夫等曾呼里氣留遠祖乃時與利代々

長岡郡蚊居田村爾住利榮盛弱利古學爾志甚深久之有氣禮婆給劣
 有之余乎之母如親念憑而年麻爾久慕來都々惟神道之意乎那母勤
 學氣留又京師爾再度迄參上伊勢國爾母參到且名立有人々乎訪比
 猶不審念隈々乎委曲乎問聞而上世乃風儀乎彌明爾知得多利故隨
 學人等母波多不少有之乎置而那母身罷爾氣留惜哉年者六十六時
 者嘉永四年十月二十八日事那利伎即同郡十市村那留小胡桃山等
 云爾葬有如此而此度隨學之徒之寄集而石文彫而立都々後世爾傳
 麻久須冀事之由記之且之可等余爾乞有隨意具那留事共者氏文爾
 讓而其大方乎如此那母

横山氏咲而亭記安政四年某月某日

布佐波之可母牟可之可母此屋號余咲而亭登云號許會唐習閑禮主
 者神習閑流人爾之氏其意氣雄々之久意太比之久氏物波言杼母物
 爾不拘書波讀杼母書爾不泥阿波禮穴面白穴樂月乎愛花乎見爾母

手附好歌念辭念爾母受張多流屋那禮婆春秋登無晝夜登無久魂相
 友乃限波誘登無杼來入居率登無杼來寄集比氏風流乎交都々孰可
 母事痛言舉波爲牟孰可母物憂論議波爲牟主乃意之雄々之久意太
 比之伎任意爭事母無久答事母無久此爾附彼爾依氏唯微咲氏而已
 那母座氣流布佐波之可母牟可之可母此屋號余然集閑流時之母醜
 翁我一言得氏之可登乞流々許登懇切那禮杼母今更々爾何乎可云
 牟穴面白穴樂阿波禮布佐波之可母牟可之可母此屋號余

土佐國坂本神社考跋安政四年丁巳冬

方今聖運洪啓陵遲式社隨顯以享祭祀而答群望唯是神德之微妙豈
 云人力之所爲矣和泉守宮地益躬博洽嗜古其所叙錄極詳可謂足能
 令人起畏敬者也願溫古之士凝信讀此書

梅花を折ておけるといふを兼題にてかける文

こてふに似たりとか昔の人もいひけんやうに梅咲きたりと告げ聞えまゐらせては

うときも人はと常は見ぐるしきあたりをいかにかたはことしげう侍る庭の蓬もすこしかき拂ひてこそとおもふものからこの頃は夜のまの風もうしるめたう侍るをあたらし盛りを過ぎなばいかに口をしからまし散ぬともよしとはえ思ひのとめかたう侍れば一枝をりて御覽せさするも老か身の心いられにこそ

二月のついたち頃やんことなき方より櫻の花にそへて文給はれるに歌もありその返事おもと人の許まで

里の梢はまだしう侍れとなにがしの峯くれがしの磯などはと思ひやり侍るものから近き頃は出たつとの物うく侍りてさふくしうのみこもり居侍る折しもある人より奉りしをまつくち翁にこそとく見せ給へるに目もかやく御歌の言葉の玉さへそひたればいぶせきふせ庵のうちの俄に光りいでたるこちぞし侍るとし頃ありがたき御心よせの大方ならざることとは思へ給へ知りながらいかで御恵のふかうおはすらんとあやしきまで思ひ給へられ侍る御返しつかうまつらんと思ひ給へ侍れと中々に口ふたがり侍りて

花のみにおもひて見めやふりて來し御袖の香さへこたふかきを

とひとりごたれ侍るをけにくく聞えけかさせんはあなかしこやさてもこのよろこびはとくくまわりて聞えさせんと白き頭のおほとれたるをやをらかきけづり手束杖とらんとはし侍れどとかく道のほとたどしく心にまかせ侍らねは時うつりなんことの名めげなるをまつこそとてなんいかで御前のとやかならんほとによく聞えてよ

右文章二卷は家翁の稚かりしほとより物せられたるか反故の端或は稿集の中にうちましらひてありしを見出づるかまに書集めて山齋集の中に收置になむ

安政六年己未八月

男 雅 賀 識

山齋集終

附 録

翁のわかゝりしほど、或人密々に告て申すやう、吾子の英才にして、邊鄙にくちはてなむは、いかにも口をしきことなり、産土を辭し、都會の地に出て、名聲を四方に轟きむには、しかじ、如何にやと。翁答へられけるは、某が六世の祖より、武臣に下り、繼て布衣にまじはり、今に世にかすまへられぬ身とはなりぬれども、土佐國守殿の恩澤をうけたること、已く五代になりぬ。今産土を去むは、重代の國恩をわするゝのみにあらず、累世の祖親をも思はざるは、虎狼にだにしかじとやいはむ、これ某がするにしのびざるところ、たとひ又ことごとくしく、名のみ出たりとも、參議にもなりのほらむこと、今世にしてはかたかるべければ、都會に出むもせむなかるべし、さればなほ草廬の中にかゝまり居て、祖々の神魂を親く祭り、生涯を安くをへむにはしかじ、とぞいはれける。翁の本性登科をこととせず、榮利をねかはす、たゞ一日もことすくなに、安からむことをこのまれたり。常に人に語りて云く、「某一草廬の中にこもり居て、或時は饑ゑ、或時は寒え、しかのみにあらず、幼より多病にして、萬の事心にまかせねば、人々しくことゝりまかなはむことかたし、たゞ天神地祇の大御惠によりて、今まで露命をつぎたる

こと、大幸なりとよろこべり、されば衆人にいやしめ輕らなむは、げにさもあるべきことわりなれば、いさゝか辱とするにもたらず、うらみとするにもたらず、又吾か常に學ぶところの道は、海内にわたるうへのことなれば、一國一郡の人にしられたり、いかでか其を榮とせむ、且急に行はるべきで、だてにしもあらざれば、身の後三百年乃至五百年をも經む中には、世上の論定りて、吾が常に書き著し、遺しおくところの道は、行はれむこと、なくてはあらじ、其時にいたりて、わが神魂天翔りて、今こそ時至りにけれと、歌ひ舞ひよろこぶべしとぞ、云はれける。まことやこの言の如く、翁手づから菜つみ、水くみなどするいとまのひまには、著述することをもみ事とせられたるが、そのかたへには、歌よみて心をぞのばへられける。

常に云く、歌よまむと思は、奈良以往の人々に交り居ること、ろもちならでは、いかに志を高くもつといふともせむなかるべし、たとひ世に用ひられ、人にしられむことをこのむとも、婦人小兒にめでよろこばれて、なむぞ腹の居ることのあらむ、又おとしをしられても、なむぞ腹たつことのあらむ、これによりて某は常に、昨日は家持卿、憶良大夫など、手を携へて山に登り、今日は金村、蟲万呂など、臂を交へて川逍遙し、又朝には藤原卿、橘御等の前に出て物語を承り、夕へには柿本、山部の朝臣等の門に入て、歌の

添削を乞ふなどぞすなる、この心もちをし、ばしもはなれては、いかでか歌と云ばかりの歌をばよみ得べき、そのいとまには、かしこくも皇神のいつくしき道を尊信して、遂にはその道の思ふまゝに行はれむ時をまちをる心もちなれば、いかでか身の貧しく賤しきをのみひたぶるになげきをるにいとまあらむとぞいはれける。うべなる哉、翁常にこの位に居られたれば、婦人小兒にあなづられおとしめられむことをば、蝦の面に水とも思はれざることよ。

又こゝに或人翁に問て云く、翁の歌に貧窮を歎かれ、病難をがなしまれたることの多くして、さらに翁の心たかきには似ざることいかにと。翁のこたへられけるよう、某いかでか貧窮を欲はむ、いかでか病難をこのまむ、貧苦病苦は人のまが事なれば、そを清くまぬかれむことは、天神地祇の御力らにだにも、およびがたきとは、前々のあとにつきてもしらるゝとなり、さればそのみに屈まりくして、二六時中なげきしづみをらむは、癡人の至といひつべし、某もとより不敏なれども、いさゝか其をさとれるが故に貧賤病苦の身にせまりてたへがたき時には、歌にのべうたひて或時はなにがしの卿にしめし、或時はなにがしの大夫にかたりつゝ、互にわらひ興じて心をのぶ、これに過たる樂やはあるべき、そもくそこは歌よむことは、富貴にあまりてのうへの翫

とのみ思へるにや、飽まで食ひ暖に著て、さて後に花鳥風月に對してよむものなりと心得、たとひ家貧しく身賤しくとも、心は富貴の人の位に居ずしては、歌はよまれぬものぞとおもふは、いたく大本たかふことにて、其は罪なくして配所の月を見むことをねがへるとひとしく、いみじきひがこゝろえなり、もし常にあくまでくらひあたゝかに著物に行くとは従者をあまた引具し、こしくるまにたすけられて、後歌はよむものなりとやおもふ、しからは長屋の王の歌に、衣かすべき妹もあらなくに」とはいかでのかのたまへる、人に衣をかりてきむは、そのもとたれかはねがふべき、旅行の寒さたへがたく、せむかたなさに、さる衣をかす女もがなあれかしと、おもひ給へる實心のきはみなり、しかるを今の世は、賤しき者にてすら、打つけに人に衣をからむをば、はぢらふるならひなるに、まして王の列にも坐す人の、さるはかなき事をかりにも口の端に出さめやと、寒さをも忍じて、しひて丈夫づくりたらむは、いみじきまけをしみと云ものにして、實の情、うはへの潤色にうばゝれはてたるしわざならずや、又人万呂朝臣の、海人とや見らむ旅ゆくあれを」とよまれたる、いかに官位下くとも、漁すなどりする海人と同列に思はれむことをば、たれかはねがふべき、されど馬車もなく、をさくしき従者だに引具せずして、長き旅路に肩まとひ裾あかづきて、ひたやつれにやつれたらむ

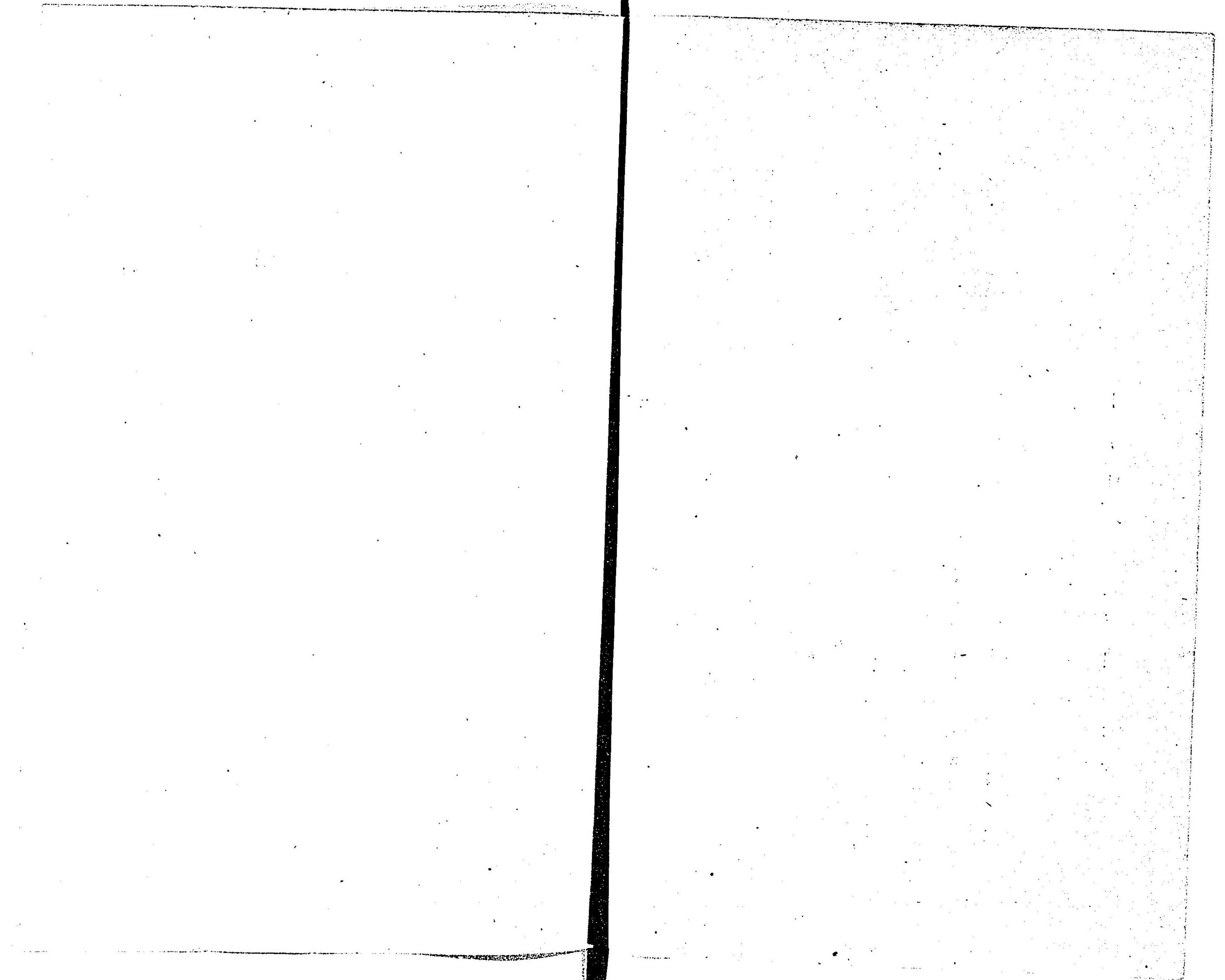
に、他目に漁民の列に思ひおとされても、今はすべなくはづかしやと、思へる心の中いかに苦しかりけむと、今誦擧るにさへいとほしく思ひやらるべく、眞の心をよみふせられたるによりて、當時自も憐愍を散じ、後の人にも賞歎せられて、末世にうたひつたへられたるは、まことに言靈の徳用にこそあれ、これらの類は、古の上手の歌よみの常なり、古人の詞をうかいひて知べし、しかるを歌は富貴にあまりてのうへのもてあそひものとおもへるより、もとより實に家富位貴き人の列は、とがむるかぎりにあらぬを、こしかた貧賤なる身にてありながら、家貧しく身賤しきさまなることを歌によむは、人わろくおもなきわざなりと思ふより、その貧賤なることをばつゝみかくして、富貴の人をまねてよむによりて、眞の心はつゆだにもあらはれず、みなつくりものなるが故に、實の歌よみたりとて、自も憐愍を散すべきよしもなく、まして、後の人のたれかは身にしめて感賞すべき、末世にうたひつたふべきことなければ、言靈の徳用と云ものはさらになく、身にあらぬこと心におぼえなきこと、いをも考出してよむ故に、心思をくるしめはらわたをひねるより他なく、つゆばかりの益とては、さらにあることなし、熟習の功はあれども、秘傳秘密極意など、云むづかしきこともなにもなければ、打明ていふなり、しかれども、遂になほ本意を得さとらずして、しが心をくるしめいたづ

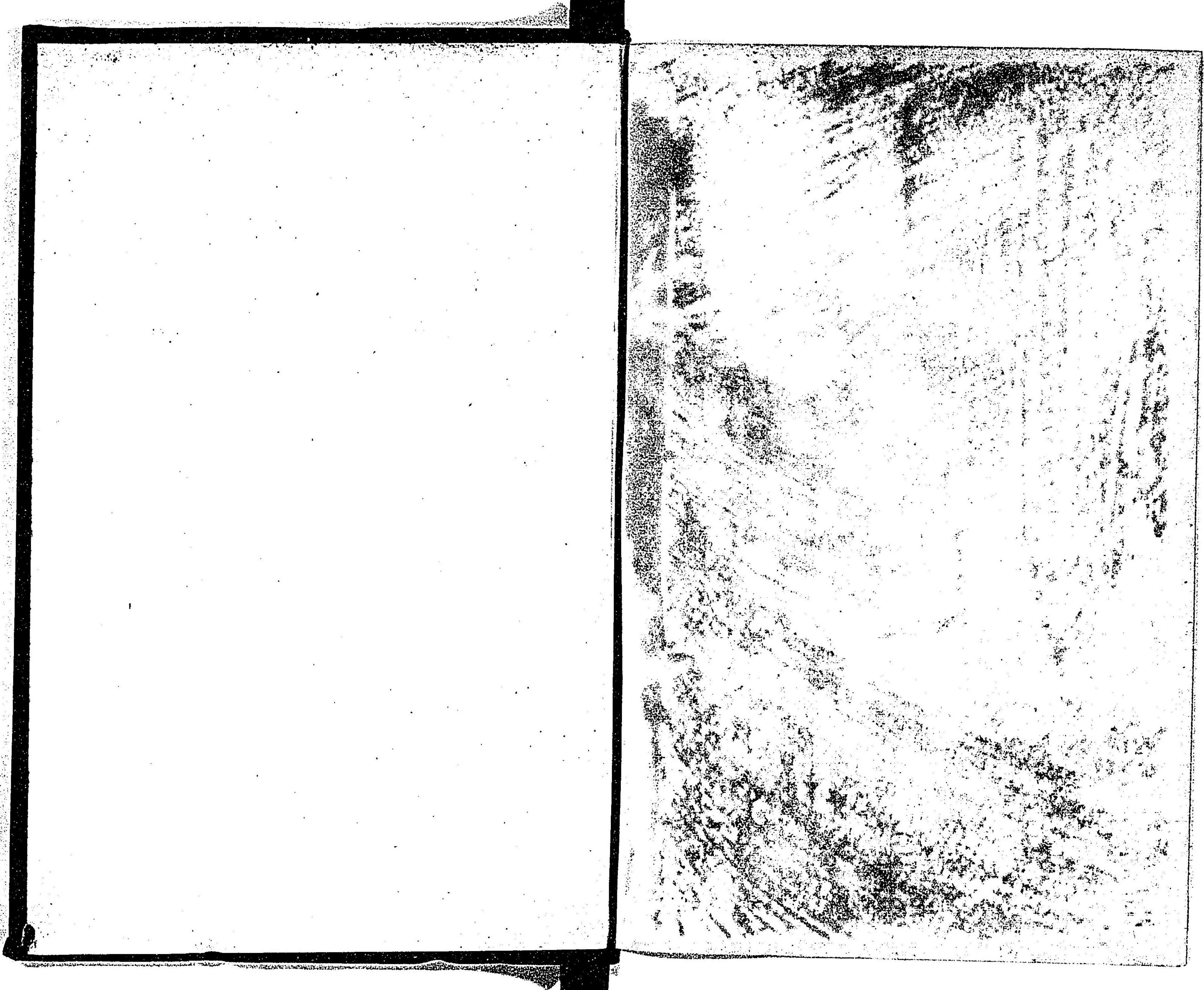
かむとならば、はやく歌よむことをきはやかにやめて、今少しなして世に裨益あらむことをなさまほし、凡人は高きもみしかきも、皇朝の大御恩をかうぶり、皇神の大御恩によりて、世に存へるることなれば、あくまでも君と神とのかたじけなきことを、東の間もわするることなく、うやまひあふぎて、己々が身のほどなくにつゝしみかしこまりをるべきに、さはなくして身のほどをもかへりみず、みだりに重々しくふるまひ、いかつかましくたかぶりて、人にうやまはせてよろこびうれしがり、しらぬ人へは己が身の貧しく賤しきほどをもつゝみかくしかざりて、なきものをもうはべには、ありげに見せかけなどするを見ては、婦人小兒はさらにも云ず、丈夫までもさる人をもみ心のはたばりひろくて、たのもしきものなりとおもひ、よろづうやくしくかしこまりつゝしみをる類をば、いふがひなくはかなきことにおもへる、後世の風俗のおのづからうつりて、歌をもその心ばへにてよむものことなれるは、正しく世の變なるを、そのあしきならはしにしみつきたる心よりは、貧しきよし賤しきさまなどを、歌によむを見ては、歌よみに似すいふがひなく、心ひくきしわざとやおもふらむ、君見すや、憶良大夫の貧窮問答の歌とて、正畧綿もなき布肩衣の水海の如、わづけさがれる可々布のみ、肩に打懸、ふせ廬の、曲廬の内に直土に、藁敷敷て、父母は枕の方に、妻子どもは、足の方

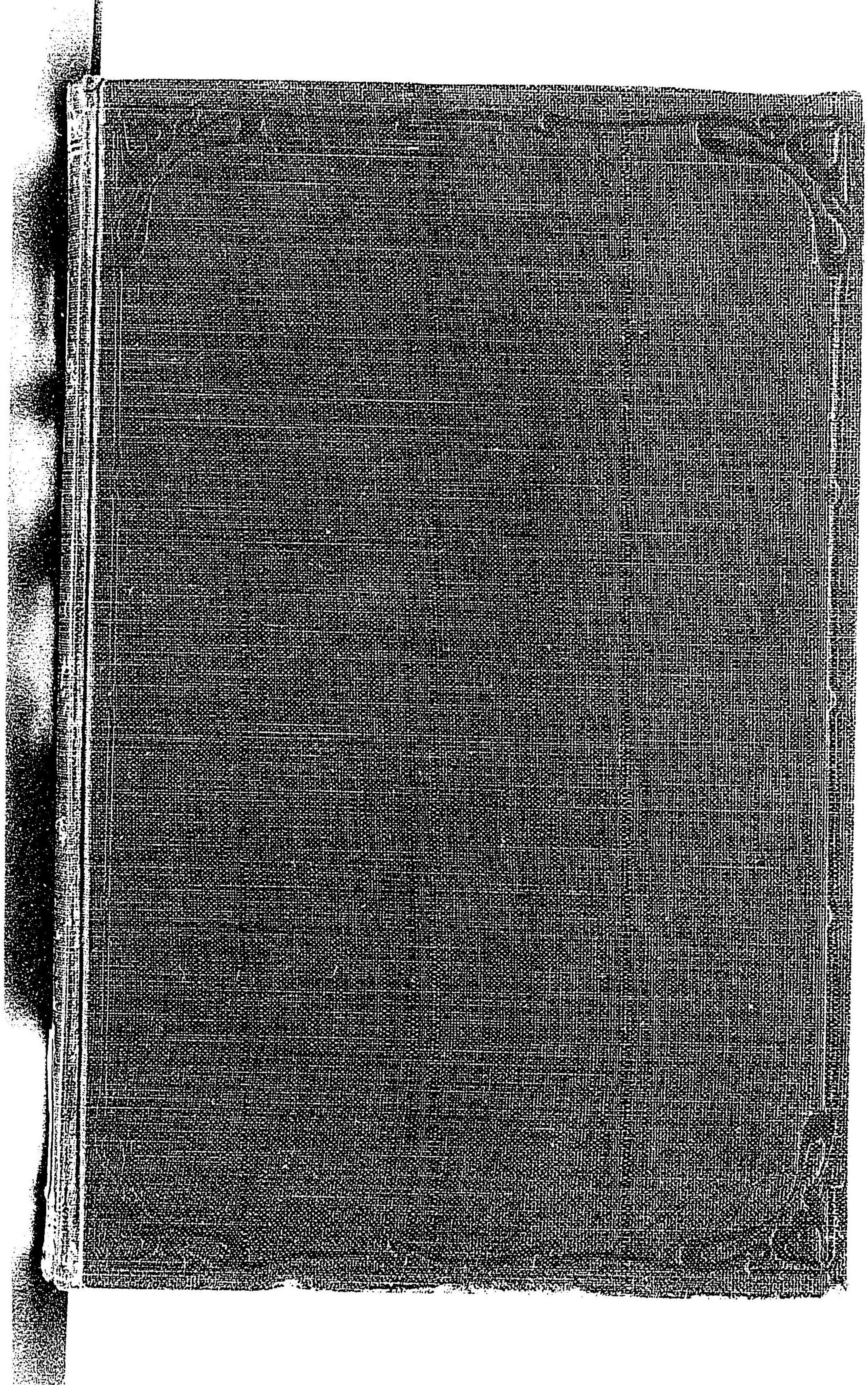
に圍居て、憂吟ひ、竈處には烟吹立す、飯には蜘蛛の巣かきて、飯炊く事も忘れて、奴要鳥の咽喚居に下尋とあるを、いかにきゝつらむ、憶良大夫もとより、富人とおぼえねば、戯に貧人を嘲りなぶりていひたることにもあらじ、また當昔は後世の如く、題詠と云ことなかりければ、王公君子の樵夫漁民の題を設けて、かれらが身の上をよめる類にもあらじ、たい直土に藁敷敷てと云、飯炊く事も忘れてといへるなどは、あまりのいひ過しとも云べけれど、その身にとりて、むげに似よらぬことならねば、貧人の形容をつよくいひて、詞をあやなし、自も爵結を寫し、聞人もあはれに感歎して、永く世につたはりて今はあまねく人口にもてあそぶことゝなりぬるは、其歌詞のをかしく興あるのみにあらず、大夫の實情の神魂と共に、日月に懸て朽さるが故なり、しかるを歌は富貴の樂にあまりてのうへの弄ものとするときは、可々布をは錦にかへ、曲廬をは高殿に換すしては、歌と云ものにはならずとやいはまし、前にも云ごとく、實に錦着て高殿の上にあそばむ人の、さる形容をいはむはまことなれば、なでふことなきを、その身貧しき人の曲廬にすみなながら、高殿の上をることといひなし、可々布うちかけながら、錦につゝまれたらむさまをよみなさむには、われも人もみな虚言なることをよくしりたるゆゑに、自ら爵結を寫さむよしもなく、まして人に賞費せられむことは、かけてもおも

ひよらねば、誰かは末世にうたひつたふべき、但し後世の題詠は論の外なり。八 其別に
云り。

附
録
終







911.168

Ka323s

Y

(M)

086037-000-6

911.168-Ka323s

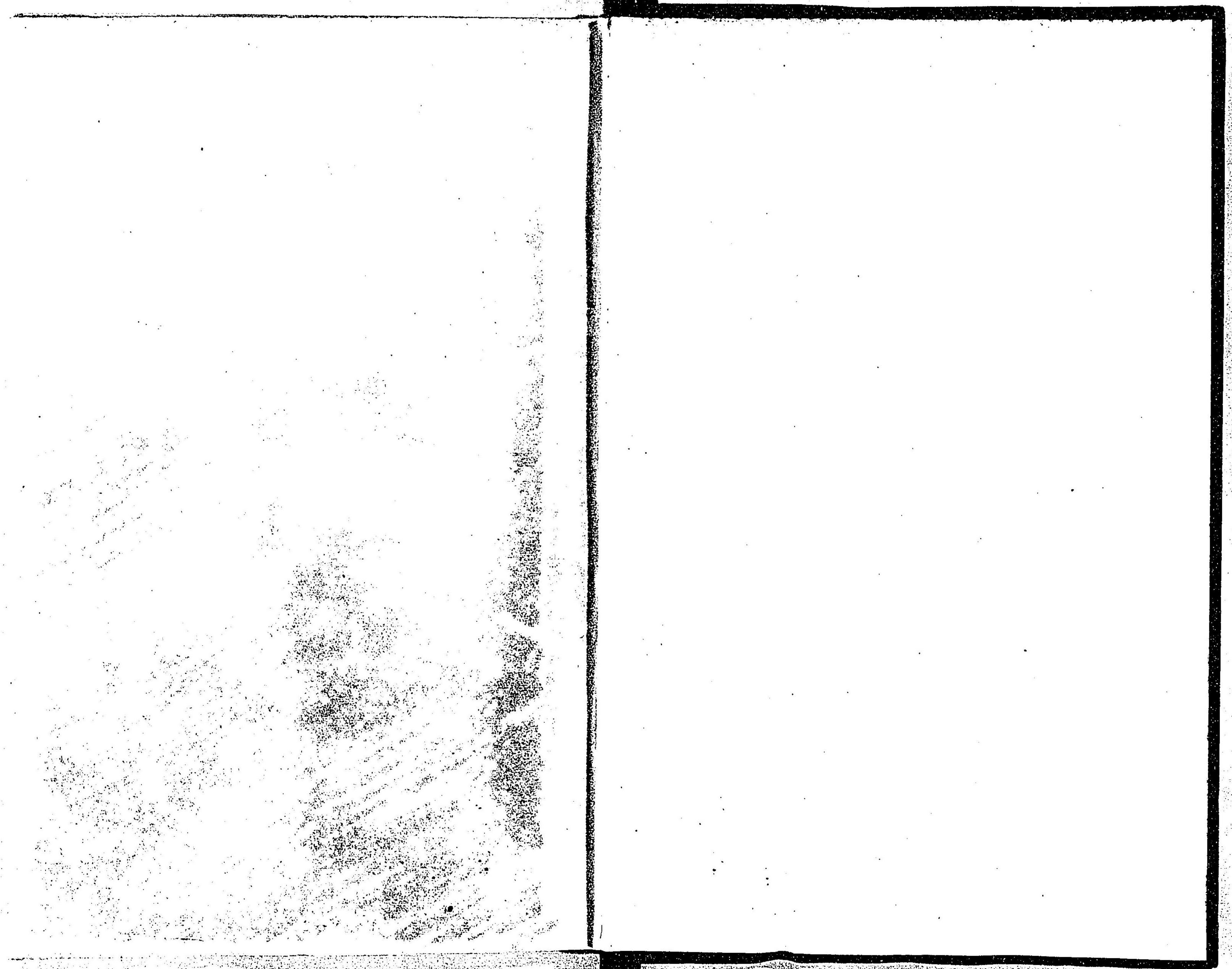
山齋集

鹿持 雅澄/著

M41

DBD-0679





山

森

衆